こんな時代にロシア語のすすめ　第８回

「万雷の拍手が好きなソ連人」

40 年ほど前のモスクワ・シェレメチェボ第 2 空港

黒田 龍之助

実をいえば、ロシアにはもう 20 年以上も訪れていません。最近はチェコとか、クロアチアとか、東欧圏ばかり。いまの興味が、そちらに向いていることもあります。

大学生から大学院生にかけては、海外へ出かけると行ったら旧ソ連に決まっていました。十代半ばからロシア語を目指してきたのですから、現地に行きたいのは当然です。でも残念ながら、留学の機会には恵まれませんでした。自分で旅行するにしても、費用がかかりますから、頻繁には行けません。

だからたいていは、JIC の通訳として現地に赴きました。

旧ソ連に限られていたかもしれませんが、その代わりあちこち飛び回りました。現在では多くの国に分かれてしまいましたので、今にして思えば、けっこう広い地域で経験を積んできたともいえます。

大きな国でしたから、移動は基本的に飛行機でした。旧ソ連時代の航空会社といえば、お馴染みのアエロフロート。当然ながら通訳で出かけるたびに、必ずお世話になりました。ときには日本の旅行社によるチャーター便ということがあり、そうなると乗客は日本人ばかり。あるときロシア人の客室乗務員が、わたしに機内放送のアナウンスを頼んできました。

原稿が渡されます。ロシア語版と日本語版の二種類あって、日本語版はすべてキリル文字で書かれていました。ロシア人はこれを、意味もわからず読み上げるのでしょうか。だったら日本人にやらせたほうが楽ですよね。しかしこれは読み難い。そこでロシア語版も参照させてもらい、アナウンスする内容を即興で考えました。

「みなさま、本日はアエロフロート航空をご利用いただきまして、誠にありがとうございます……」

それっぽく訳したつもりだったのですが、実は機内放送の日本語アナウンスなんて、あまり聞いたことがありませんでした。旧ソ連は飛び回っていても、日本国内を飛行機で移動する経験は、ほとんどなかったのです。だからきっとテレビドラマ（たとえば『スチュワーデス物語』とか）の真似みたいなものだったに違いありません。思い出すと恥ずかしい。

飛行機が着陸したら拍手をする。この習慣は今もあるのでしょうか。

はじめてのときは驚きました。モスクワやレニングラードに到着の際、飛行機が無事に着陸して滑走路を滑り出すと、機内のあちらこちらから拍手が起こるのです。みなさん遠慮がちに、それでもほぼ全員がパチパチとやります。

無事に着陸してよかったね、機長さんありがとう。

そんな気持ちが込められるのではないでしょうか。悪くない習慣です。

旧ソ連は拍手が好きな国でした。JIC から派遣されるときは、友好団とか親善交流とか、そういう関係が多かったので、たいていは和やかな雰囲気。政治会談やビジネス交渉ではないのです。ところが、いかんせん言語が通じない。かといって、お互いニコニコしているだけでは疲れる。だから拍手なのではないか。当時はそんなふうに考えていました。

一方、新聞の政治欄では「嵐のような拍手」が定番表現で、権力者のご機嫌を損ねないよう頑張って拍手するのだというような噂が、まことしやかに流れていました。そちらが和やかだったどうかは、幸か不幸か知りません。

話を飛行機に戻しますと、わたしはこの着陸時の拍手が、世界共通の習慣だとばかり信じていました。井の中の蛙ってやつです。アエロフロート以外の飛行機でヨーロッパに着陸したとき、いつもの調子で拍手をしたら、周囲の乗客から不思議そうな眼で見られ、あれは恥ずかしかったなあ。

反対の例もあります。1990 年代半ば、韓国語を専攻する若い友人と、ソウルからタシケントまで飛びました。ウズベク航空の機内は、あの懐かしい雰囲気。手荷物を無理やり積み上げるおばさん、長時間座っていたから腰が痛いといって通路で踊り出すお姉さん、さらには手荷物からどうして所持しているのかナイフを取り出して、タマネギをスライスするおっさん……。友人はあっけに取られていましたが、何よりも驚いたのが着陸時の拍手」でした。

いったい、なんなんすか？

わたしはかつて自分にされた説明を、友人にくり返しました。アジアのワイルドな地域をあちこち旅行し、経験を積んできた彼でさえも、この経験は新鮮だったようです。

ただし、いつでも拍手をすればいいというものではありません。

というか、まったく拍手をする気になれなかったことがありました。

1990 年代後半あたりから、ヨーロッパに出かけることが多くなるのですが、あるときドイツのベルリンからモスクワ経由で日本に帰ることがありました。ヨーロッパでカミさんと語学研修を受け、その後すこし旅行したりしたのですが、日本を出国してから一ヶ月半、ベルリンに到着したときには、さすがに疲れていました。それでも荷物もすべて預け、あとは飛行機を乗り継いで帰るだけ。機内ではゆっくりしよう。

モスクワまでの飛行機は小型で、空港では機体のそばまで歩かされました。空港施設と直接に接続できないのでしょう。近づいてみれば、あまり新しくない、というか、明らかにボロい機体。しかもそこにはロシア語だけでなく、某アジアの言語でも併記。なんか不吉な予感。搭乗し、座席に腰を下ろして周囲を見回すと、機内はなんだか薄汚れていて、通路を挟んだ隣の座席は、シートベルトが千切れていました。

飛行機は定刻に飛び立ち、高度が安定してくると食事の時間となります。アエロフロートの食事は残念ながら、今も昔もあまり評判がよろしくないようですが、それでもワインを頼んでハムなどをつまんでいれば、心が和みます。やれやれ、今回も無事に終わったな。

ところがです。機内がガタガタと揺れ始めました。気流の悪いところに入ったのでしょうか。多少ならよくあることですが、そのときの揺れは治まるどころか、激しくなる一方。機内放送が入り、この先も揺れがひどくなるので、食事は中止だとのこと。客室乗務員が来て、食べかけの食事を持ち去ります。あらら。ですが飲み損ねたワインを悔やんでいる場合ではありません。揺れはどんどん酷くなり、もう水すら飲めません。

ヒューン。

ジェットコースター並みです。

飛行機が急降下するのがわかりました。今ので何メートル下がったのでしょうか。しかもそれがくり返されるのです。生きた心地がしません。あのときはカミさんと二人、短い人生を嘆く気持ちになったことを、ここに告白します。いや、本気で死ぬと思いました。

さんざん揉まれた挙句、ようやくモスクワへ到着しました。周りの乗客もやれやれといった表情。機内放送が入り、機長からお気楽なあいさつ。「ずいぶん揺れましたが、とりあえずモスクワに着いたのですから、いや、よかったよかった」

ふざけんな！

このときは誰も拍手しなかったことを覚えています。

そんなこともありましたが、わたしはこの着陸時の拍手が今でも好きで、飛行機が到着して滑走路を滑り出すとき、こっそりと拍手をしているのです。

＜日ロ交流情報＞

日本ウラジオストク協会が総会（4 月 13 日）

「生田のウラジオ」ロシア料理店 TWINS にて

日本・ウラジオストク協会（藤本和貴夫会長）の年次総会が 4 月 13 日に行われました。会場は「生田のウラジオストク」こと、ウラジオストク出身の双子姉妹 田中ダイアナさんと斉木エレーナさんが川崎市生田で営むロシア料理店「TWINS ツインズ」。

定例の活動報告や決算、予算などの確認のあとは、ツインズの 2 人を囲んで懇談サロンが行なわれました。ボリュームたっぷりのボルシチ、ロールキャベツやペルメニなど本格ロシア料理を楽しみながら、在日歴 20 年の 2 人がこの時期に生田でロシア料理店を開いたわけ（開業は 23 年 8 月）や、伝統ロシア料理へのこだわり、プロの画家でもあるエレーナさんが手づから描いたホフロマ絵の内装など、ロシア料理や文化を通して、もっともっとロシアを理解してもらいたいという思いを聞かせていただきました。

ロシア文化フェスティバル 2024 in Japan

日露合同オープニングコンサート(4 月 22 日)

ロシア文化フェスティバルの今年のオープニングコンサートが、4 月 22 日、紀尾井ホール（東京都千代田区）にて開催